

## 研究報告

## 双子を正期産で出産した母親の育児体験 — 肯定的感情が母親役割の獲得へ及ぼす影響 —

Parenting experiences of mothers having term twins : Influences of positive feelings on maternal role

今野 和穂<sup>1)</sup>  
Kazuho Konno

廣瀬 幸美<sup>2)</sup>  
Yukimi Hirose

臼井 雅美<sup>1)</sup>  
Masami Usui

石田 貞代<sup>3)</sup>  
Sadayo Ishida

キーワード：正期産、双子、育児体験、肯定的感情、母親役割

Key Words : term delivery, twins, parenting experience, positive feelings, maternal role

目的：双子を正期産で出産した母親の育児体験から肯定的感情が母親役割の獲得へ及ぼす影響について検討することを目的とした。

方法：双子を正期産で出産した母親5名を対象に、産後3か月間の育児体験について半構造化面接法を実施し質的統合法（KJ法）を用いて分析した。

結果：双子の母親は、【理解のない周囲へのストレス】と【双子育児でのプラスとマイナス面を意識】しながらも、【双子育児の中で試行錯誤】する中で、【双子を理解していく楽しみ】を感じながら【自分なりの育児確立】をし、【双子の母親としての達成感】や【自己成長を感じる喜び】という肯定的感情を体験していた。

考察：双子の母親の肯定的感情は、愛着形成と母親としての自信を得る体験に関連し、母親役割の獲得へ影響を与えていると考えられた。また、肯定的感情を伴わない体験も育児の中で試行錯誤することで肯定的感情を伴う体験へ繋がり、母親役割を獲得することに関係していた。

### Abstract

Objective : To examine influences of positive feelings on the acquisition of maternal role through parenting experiences, involving mothers who have delivered twins at term.

Methods : Semi-structured interviews were conducted with 5 mothers who had delivered twins at term, focusing on their parenting experiences during a 3-month postpartum period, and their positive feelings were analyzed, adopting a qualitative and integrative method (the K-J method).

Results : The mothers of twins had suffered from [stress due to others' insufficient understanding] and [conscious of merit and demerit related to parenting twins]. While [repeating trials and errors in the process of parenting the twins] and [enjoying becoming able to understand the twins], they had [established an original parenting style], and this had helped them develop [a sense of accomplishment as a mother of twins] and [realize self-growth with joy].

Discussion : Twin mother's positive feelings concerned with attachment and maternal confidence. During the 3-month postpartum period, parenting experiences which is repeating trials and errors had nurtured the positive feelings of the mothers of twins, contributing to their acquisition of the role of the mother. This suggests the necessity of nursing approaches to support mothers' positive feelings during parenting, with a view to promoting their acquisition of such a role.

Received : October. 30, 2015

Accepted : February. 17, 2016

1) 帝京平成大学ヒューマンケア学部看護学科

2) 横浜市立大学医学部看護学科

3) 横浜創英大学看護学部看護学科

## I 緒言

双子は生殖補助医療の進歩普及とともに増加し、現在はピーク時の2004年と比べ減少しているが、日本における分娩件数の減少割合が大きい中、双子の分娩件数の変化はわずかである<sup>1)</sup>。そのため、相対的には双子の割合が増えていると言える。今後も高い割合を維持すると考えられる双子の母親についての理解と支援の充実は一層重要な課題である。

双子の妊娠・出産は単胎妊娠に比べて妊娠合併症を起しやすく<sup>2)</sup>、早産、低出生体重児も多く<sup>3) 4)</sup>、母児ともにハイリスク<sup>5-7)</sup>である。産後の育児では、低出生体重児は吸着力が弱く母乳の飲みも悪いことが多いため、母親にかかる授乳の負担も大きい。さらに、双子の母親は、2人の子どもを同時に育児することに加え、子どもが未熟な状態で出生することが多いことから育てにくさを感じながらの育児となる。そのため、単子の母親と比較し身体疲労<sup>8-10)</sup>、ストレス<sup>11)</sup>など身体的にも精神的にも負担が大きく、双子は単子よりも被虐待児になる危険が高く、児童虐待のハイリスクグループとして位置づけられている<sup>12)</sup>。

ハイリスク児フォローアップ研究会の提唱に基づき、現在NICUから退院した子どもは母子に対し頻回かつ長期的なフォローアップが行われるようになってきた<sup>13)</sup>。しかし、全ての双子がNICUに入院するわけではなく、低出生体重児でも正期産児である場合、子どもに何らかの異常が見られなければ、母親と共に退院となる施設が多い。さらにその場合は1か月健診で病院側のフォローは終了し、地域で開催される健診でのフォローアップのみとなる。双子がNICU入院とならない場合は、母子分離によるリスク<sup>14)</sup>はなくなる一方で、母親は産後の体調回復もままならない状態で育児技術を習い、単子の母親と同等の産褥入院期間で退院となる。双子の母親の中には、正期産までの妊娠継続をするために妊娠中期から安静を保持し、筋力低下した状態で出産を迎え、2人の子どもの育児に取り組んでいる母親もいる。特に3か月までは母子の睡眠覚醒リズムの不一致<sup>15)</sup>や、2人の子どもの授乳時間の不一致<sup>16)</sup>から生活リズムは乱れやすく、定額や体重増加によって哺乳が安定するまでの間は授乳時間も長くかかり<sup>17)</sup>、母親の休息は取りにくい状況である。育児になれたと思えるようになるまでの最初の3か月間が母親にとって身体的にも精神的にも大変な時期である<sup>18)</sup>とされている。このような状況の中で双子の母親は育児手技を習得しながら双子との相互作用を通して母親役割を獲得していかなければならない。

単子の母親が母親役割を獲得する際には、様々な試みや楽しみを通して母親としての自信や効力感、自己肯定感を得ていることが明らかとなっており<sup>19) 20)</sup>、母親役割の獲得へは肯定的感情が影響している。また、母親役割は、子どもとの相互作用を通して獲得されている<sup>21)</sup>。そのため、双子の母親が母親役割を獲得する際にも子どもと相互作用する育児体験が関係し、肯定的感情が影響しているのではな

いかと考えられる。しかし、双子の母親の母親役割の獲得について検討した文献は見当たらない。

単子の母親は、子どもの存在そのもの<sup>22) 23)</sup>や子どもの成長発達を感じた時<sup>22) 24) 25)</sup>、子どもの反応を読み取れるようになり子どもとコミュニケーションをとれるようになる<sup>22) 24)</sup>ことで楽しく感じており、子どもとの相互作用の中で肯定的感情が認められていた。双子の母親は、退院後1か月間に子どもの存在、子どもの反応や成長発達への気づきを授乳行動の中で感じたとき、夫婦で育児を行っている実感を得たときに肯定的感情を抱いていた<sup>26)</sup>。また、双子の母親は、退院後1か月間の授乳行動において肯定的感情と否定的感情が混在しながら、マイナス体験とその感情の克服によって喜びを感じていたことが明らかとなっている<sup>26)</sup>。加えて、産後4か月以降の双子の母親は、双子一人ひとりの個性や相互作用に気づいた時に喜びを感じ、対応できていると感じた時にも肯定的感情を持ち、双子の母親としての自信を得ていた<sup>27)</sup>。よって、双子の母親の肯定的感情は子どもとの相互作用と母親としての自信を得ることに関係していると考えられる。しかし、双子の母親の育児体験と肯定的感情は、退院後1か月間、4か月以降について明らかとなっているが、双子を正期産で出産した母親にとって大変な時期である産後3か月間については明らかとなっていない。

そこで本研究では、双子を正期産で出産した母親の産後3か月間の育児体験を分析し、育児体験における肯定的感情が母親役割の獲得へ及ぼす影響について検討することを目的とする。双子の母親の育児体験における肯定的感情と母親役割の獲得について分析することは、育児の中で肯定的感情を実感する機会を増やし、母親役割の獲得を促進するための一助になると考える。

## II 用語の定義

### 育児体験

授乳、オムツ交換、沐浴、着替え、寝かしつける、子どもを連れての外出など日常の育児を通して、子どもや母親を取り巻く人々との相互関係の中で出会う出来事やそれに対する思い。

### 肯定的感情

母親として子どもや夫、周囲との関わりを通して感じるうれしい、楽しい、面白い等の肯定的な気持ち。マイナス体験の克服などの肯定的な思い。

### 母親役割

子どもとの相互作用を通して、自身の成長のために葛藤し、母親としてのアイデンティティを積み上げること<sup>21)</sup>。

## III 研究方法

### 1. 研究デザイン

質的帰納的・因子探索研究。

## 2. 研究参加者

正期産で出生した生後4か月以上1歳未満の双子を育児中の初産の母親5名である。分娩様式は問わず、NICU入院等による1か月以上の母子分離既往がなく、産後3か月間に双子育児に取り組んでいた母親とした。

## 3. 研究参加者の選定理由および除外基準

先行研究によって産後3か月間が心身共に最も大変な時期である<sup>17) 28)</sup>こと、生後11～16週に双子の睡眠パターンが揃ってくる<sup>15)</sup>ことが明らかとなっている。よって、落ち着いて自己の体験を振り返り、語りができる時間が確保され、且つ記憶の鮮明な時期を考慮し、この時期の双子の母親を選定した。母親が精神疾患を合併している場合、双子の1人または両方に何らかの障害及び合併症がある場合、経済的に困窮している家庭、ひとり親家庭、外国人の母親についてはインタビュー時の語りに影響を及ぼすことが考えられるため研究参加者としなかった。

## 4. 調査期間

調査期間は平成25年6月から10月である。

## 5. データ収集方法

### 1) リクルート方法

A市およびその周辺の双子の母親が集まるサークルや子育て支援拠点の代表者へ研究依頼書を送付し、内諾が得られた施設に研究者が伺い、説明後同意を得た後に研究参加者のリクルートを実施した。研究参加者へも研究者が文章及び口答で説明した。同意が得られた研究参加者と相談し、インタビュー日時、場所を決めた。

### 2) インタビュー

インタビュー実施の日時と場所は研究参加者の希望に合わせ、自宅、許可が得られた子育て支援施設内の個室、サークル活動施設内の個室にて実施した。母子健康手帳から基礎的データを確認後、半構造化面接法により、「出産後3か月間の双子との生活についてお話ししていただけますか？」等の質問をし、3か月間の育児体験とその時の気持ち、嬉しい楽しいと感じた時について30～40分程度インタビューをおこなった。インタビュー中は、語りの内容が3か月間の体験であるか、その後の体験と混同していないかに注意を払い、その都度体験の内容と体験時期について研究参加者へ確認を行い、データの妥当性確保に努めた。インタビュー内容は、承諾を得てボイスレコーダーに録音した。

## 6. データ分析方法

データの分析には質的統合法（KJ法）<sup>29)</sup>を用いた。この方法は、混沌とした現実から極力生のままの素材をまとめ、現象にある多くの変数を取捨することなく、その全体像を構造的にあらわすことに優れた方法論であり、対象のあり様を示すことができる手法である<sup>30)</sup>。分析方法選定の理由

は、多くの変数を取捨することなく双子の母親の育児体験のあり様をあらわせることが、育児体験から肯定的感情が母親役割の獲得へ及ぼす影響について検討する本研究に適していると考えられたためである。

まず、研究参加者毎に個別分析を実施した。個別分析では、訴える育児体験の内容が1つになるように逐語録から単位化ラベルを作成した。そして、ラベルをよく読み、そのラベルの示す体験の意味内容の類似性に着目して2～5枚程度集めてグループ化し、集まったラベル全体の意味を一文で表し、新たなラベルとした。この作業を5～7つのグループになるまで繰り返し実施し、最終ラベルを得た。次に、個別分析の最終ラベルを用いて個別分析と同じ手順で全体分析を実施し最終ラベルを得た。全体分析の最終ラベルをその関係性に着目して配置し、空間配置図を作成した。その後全体像の構造と最終ラベルの関係性を踏まえ、全体像が何なのかを端的に表す機能を持つシンボルマークを示した。シンボルマークは、全体像におけるラベルの位置づけを表す事柄と、最終ラベルの内容を凝縮して表現しラベルの固有性を表すエッセンスの2重構造を用いて示した。

分析のプロセスにおいては、妥当性を確保するため質的統合法（KJ法）に関する専門家と母子看護学領域の研究者によりスーパーバイズを受けた。

## 7. 倫理的配慮

本研究は横浜市立大学医学研究倫理委員会の承認を受けて実施した（審査年月日：平成25年5月30日、承認番号：A130530009）。研究の協力依頼に際しては、研究参加者の匿名性とプライバシーを保持し、研究への協力は自由意志で随時撤回できること、また、研究結果を学会、論文等で発表することを含めた研究の趣旨、方法、倫理的配慮について文章と口答にて説明をおこない、同意を得た。インタビュー中は、子どもの安全のためにベビーシッター（看護師）を同行して対応した。インタビュー中に子どもが泣き出してしまった場合はインタビューを中断し、子どもへの対応を優先した。

## IV 結果

### 1. 研究参加者の概要

研究参加者は双子を37週台の正期産で出産した母親5名であった。インタビュー時の双子の月齢は、7か月から10か月であった。年齢は30代前半4名、40代後半1名で、全員が核家族であった。5名中2名は不妊治療後の妊娠であった。分娩方法は予定帝王切開術3名、緊急帝王切開術2名、経膈分娩はいなかった。児の出生体重は2000g台から2900g台で、双子10名のうち7名が低出生体重児であった。平均インタビュー時間は41分であった（表1）。

表1 研究参加者の概要

年齢	分娩方法 (予定・緊急)	出生時週数	双子の 性別	出生時体重		母子同日退院 別日退院	インタビュー時 の双子の月齢	
				第1子	第2子			
A	30代前半	帝王切開 (予定)	37週6日	女・女	2400g台	2000g台	同日退院	9か月
B	40代前半	帝王切開 (予定)	37週3日	男・男	2500g台	2600g台	1人同時 1人別日	9か月
C	30代前半	帝王切開 (緊急)	37週2日	女・女	2100g台	2400g台	同日退院	7か月
D	30代前半	帝王切開 (予定)	37週1日	男・女	2900g台	2400g台	同日退院	10か月
E	30代前半	帝王切開 (緊急)	37週0日	男・男	2300g台	2200g台	同日退院	8か月

注) 別日: 2日後GCUより退院

2. 双子を正期産で出産した母親の産後3か月間の育児体験  
個別分析の最終ラベルは、A氏5枚、B氏5枚、C氏5枚、D氏6枚、E氏5枚が得られた。個別分析の最終ラベルを用いて全体分析をおこなった結果、7枚の最終ラベルが得られた。最終ラベルを用いて図解化をおこない、シンボルマークである事柄とエッセンスが抽出された(図1)。

以下に全体分析について事柄【 】を用いて説明する。図1との関連を示すために( )中には①～⑦で図中の番号を示した。その後シンボルマークについて事柄を【 】、エッセンスを〔 〕、単位化ラベルをイタリックで表記する。事柄、最終ラベル、単位化ラベル代表例については表2に示した。

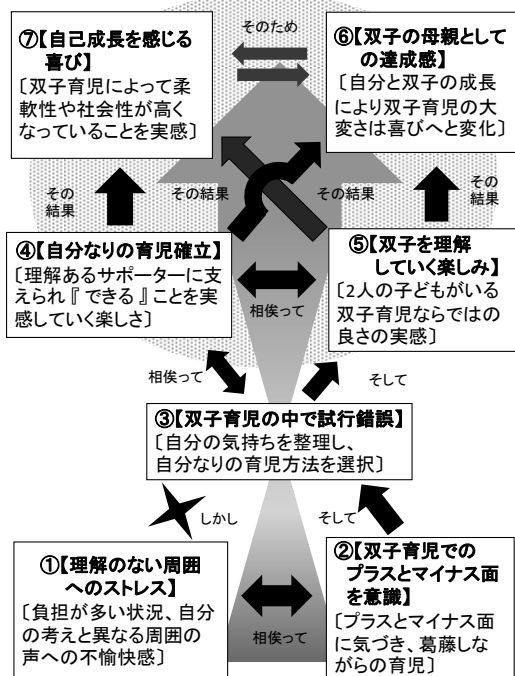


図1 双子を正期産で出産した母親の産後3か月間の育児体験

注) 図中の【 】は事柄、〔 〕エッセンスを示す。

双子を正期産で出産した母親は、【理解のない周囲へのストレス】(①)と【双子育児でのプラスとマイナス面を意

識】(②)しながら、【双子育児の中で試行錯誤】(③)していた。そして、負担が多い状況や自分の考えと異なる周囲の声への不愉快感による【理解のない周囲へのストレス】(①)も、【双子育児の中で試行錯誤】(③)しながら自分の気持ちを整理し、自分なりの育児方法を選択していったことで、その後は【自分なりの育児確立】(④)へと繋がった。また、【双子育児の中で試行錯誤】(③)することを通して【双子を理解していく楽しみ】(⑤)となり、【自分なりの育児確立】(④)と相俟って、その結果、双子の母親は【双子の母親としての達成感】(⑥)と【自己成長を感じる喜び】(⑦)を体験していた。

1) 【理解のない周囲へのストレス】

〔負担が多い状況、自分の考えと異なる周囲の声への不愉快感〕

自分では大丈夫って思っても、やっぱり、母とか、義理の母とか、いつもはイラッとしないようなところで、今考えるとすごくしてたなって。(中略)なんか、注意されたくない、とか。そんな。神経質になってたかもしれない。(E)

親から一生懸命授乳してんのに『足りないんじゃないの?』とか、親戚とか来て『やっぱりおっぱいであげてるの?』とか。全部母乳でできないプレッシャーがあって、『ああ、最近はミルクもあげてるのね』とか。おばさんたちから言われるのが、今思えばほんとに些細な言葉なんだけど、でもその時は、なんかやだなって思いました。(A)

2) 【双子育児でのプラスとマイナス面を意識】

〔プラスとマイナス面に気づき、葛藤しながらの育児〕  
2人いるのは、それはそれで。いいかな。ただ、その、片方がすごいべったりなんで。向こうの子が我慢しなければいいんですけど。その辺がどうなのかなあって。自分のペースで勝手に、離れてるんならいいんですけど。影響してるんじゃないかなって言うのはちょっと、気がかりではありますけどね。(D)

(実家に里帰りだったこと) どうなんですかね。たぶんその方が良かったのかなって思うんですけど。ただ、ちょっと、主人とあんまり会えなかったっていうのは、それもちょっとどうかなって思って。本当は、なんか、実家

表2 双子を正期産で出産した母親の産後3か月間の育児体験

事柄	最終ラベル	単位化ラベル 代表例	
①【理解のない周囲へのストレス】	産後はイライラしやすく、自分ばかりが負担をしている状況や、子どもの事を一番考えて選択した育児方法を理解されず、自分の考えと異なる周囲の声に気が障った	自分では大丈夫って思っても、やっぱり、母とか、義理の母とか、いつもはイラッとしないうところで、今考えるとすごくしてたなって。(中略)なんか、注意されたくない、とか。そんな。神経質になってたかもしれない。	E
		ちっちゃく生まれたほうが、やっぱり、ミルクもおっぱい飲むのも下手くそだったので。最初のうちはちっちゃい子は授乳をしないで、搾乳してそれを飲ませて。まずは体重を増やしていこうみたいな感じで。	A
		親から一生懸命授乳してのに『足りないんじゃないの?』とか、親戚とか来て『やっぱりおっぱいであげてるの?』とか。全部母乳でできないプレッシャーがあって、『ああ、最近ミルクもあげてるのね』とか。おばさんたちから言われるのが、今思えばほんとに些細な言葉なんですけど、でもその時は、なんかやだなって思いました。	A
②【双子育児でのプラスとマイナス面を意識】	双子にお揃いを着せられる喜びはあるが、2人いることで1人が我慢しているのではないかと気がなったり、実家のサポートはあるのは良いが、夫がなかなか会えに来れないことは気になるところというプラスとマイナス面に対して葛藤しながら選択していた	2人いるのは、それはそれで、いいかな。ただ、その、片方がすごいべったりなんで。向こうの子が我慢しなければいけないんですけど。その辺がどうなのかなあって、自分のペースで勝手に、離れてるんらいいんですけど。影響してるんじゃないかなっていうのはちょっと、気がかりではありますけどね。	D
		(実家に里帰りだったこと) どうなんですかね。たぶんその方が良かったのかなって思うんですけど。ただ、ちょっと、主人とあんまり会えなかったっていうのは、それもちょっとどうかかって。本当は、なんか、実家にはもっと長く居てもいいんじゃないって母親には言われたんですけど。私はちょっと、あんまり主人と離れてるのどうかって。いろいろ将来慣れてもらわないといけないし。だから、私はちょっと、それを気にしてましたね。	B
③【双子育児の中で試行錯誤】	双子育児は単子の育児のようににはできない事に納得し、自分の気持ちに整理をつけ、自分に合う方法を選択し、積極的にサービスを活用したことで、大変だったが精神的にはつらくない	(授乳は) 起して飲ませることが多かったですね。まずおっぱいを飲ませてからミルクっていう順番だったので、同時に泣いちゃったときは1人はミルクを先に飲ませて、で、もう、抱いて飲ませるとかはしてなくて、タオルとかに立てかけて、哺乳瓶を。それで飲ませてたんですけど、その間におっぱいを飲ませて、しばらくしたら交代みたいにやりました。(そういうやり方は) 多分本に載ってて、本で読んだり、インターネットで見たりしてました。	B
		生まれた時ちっちゃかったんですよ。だから2人も直母ができなかったんですよ。で、搾乳とかして与えてたんですけど、搾乳して、哺乳瓶で飲ませて。1人がミルクとか。あと、1日おきとかにやったりとかしてたんですけど。3か月になるくらいまでやってはいたんですけど、なんか、その、母乳もけっこうエネルギーが必要で、自分もちゃんと食べなきゃいけないし、なんかその、吸い取られる感じがあったので、ミルクに切り替えちゃった感じですね。	C
④【自分なりの育児確立】	双子が同じポーズをしているのを見ると2人いてよかったと思え、育児量は2倍だが、実家や自主的に育児を実施してくれる夫、自分のやり方を肯定してくれる医療者のサポートによって身体は疲れているが精神的しんどさはなく、できることが増えていく実感があると楽しくなった	ふとした時にみたら同じポーズで寝てたりとかすると、ああかわいいと思って。そういう(同じポーズで寝てる)時は多いですね。毎回じゃないですけど。そういうのを見ると癒されます。	A
		(夫は) 夜みてくれたりとか。寝かすために。夜中の3時に交代ねとか。	D
		最初の、実家にいた1ヶ月は全然寝れなくて、旦那さんと、うちの母親と、3交代みたいな感じで。最初のうちはすぐ目覚めてたんですけど。だんだん慣れてきて。泣き声も。起きる声も。起きるようになって。母親がミルクやってくれたりとかして。	A
		そんな辛いって感じではなくって。やっぱり身体は疲れて眠い、みたいな。気持ち的にはそんなに。しんどいとかはなかったですね。	A
⑤【双子を理解していく楽しみ】	2人いることで1人の子と上手いかわない場合でも、もう1人の子の存在によって上手いかわない事だけを意識することはなく自分を責めずすむことや、2人の違いを理解できること、2人一緒の様子を見られることは双子育児ならではの良さである	1週間後に病院に体重測定で行ったときにミルク足さなくていいのって周りに言われるんですけどよって言ったら、助産師さんたちが「全然大丈夫だよ」って「自分のやり方で全然間違っていないよ」ってすごい言ってくれて、安心しました。	A
		2か月めに入って(授乳時の) 吸い付き方がやっぱり強くなって。上手になってきたなって。最初に比べると、しっかり吸い付いてくれるなって。(兄の吸い方が上手になってくると) 自分も楽だし。お互いちょっとだけ余裕ができてきて、よかったです。	A
		そんなにすぐ、もともと落ち込んだりとか、マイナスに、考える方じゃなかったかもしれないけど、次の子がいるし、そのこと(うまくいかなかったこと) ばっかりにかまってるんじゃないし。やんちゃなやつ。もういいや、次行こうって。	A
		子どもの心配事に関して、片方だけに現れるなら育て方の問題じゃなくって、その子の性格っていうか、体質っていうか、そういう問題って割り切れるので、そんなに自分を責めずに済むかもしれないですね。	D
		最初のうちは、甘えん坊な泣き虫と自由奔放な人って感じだったんです。なんか1人はホントよく泣く子で、ずっと抱っこばかり。もう1人の子はあんまり抱っこしなくて大丈夫かなって思ってたんですけど。でも、そのうち逆になつたりして。2人の違いを見つけれられておもしろいなあって感じますね。	A
⑥【双子の母親としての達成感】	自分の事よりも双子優先で育児に取り組むことで自分自身に体力も付き、双子が成長したことで心身共に楽になり余裕もでき、自分の頑張りを確認できると自信が得られ、外出先で頑張ってる等と声をかけてもらえることも双子育児の大変さは喜びへと変わっていった	2人の性格の違いが多分現れてきたっていうか、3か月くらいの間です。多分1人目の子は愛想がよくないんですよ。べつになんかこうマイペースっていうか。自分のやりたいうようになんですけど。2人目の子は、なんか愛想が良くて、こう、笑顔振りまくってっていうか。そういう感じが出てきて。いたずらっぽい笑いをニッと、こうニヤッとするっていうか。そういうのは上の子にはないんですよ。	B
		3か月の終わりごろだと思うんですけど。ちょっと2人がお互いが意識してたようなことがあって。どうも下の子が上の子と交流を持ちたい感じで、こう、触ろうとして。上の子は嫌がって。なんか、機嫌悪いんですね。それをずーっと見てると、なんかおかしくて。写真撮っちゃったんですけど。それが、なんか心に残ってます。	B
		ふと、ベットとか見たときに2人おる。みたいな。そういう面白さはあります。お、赤ちゃん2人居る、みたいな。	E
		最初の1か月は休む暇ないですね。ホントに歯磨き行けなかったんですよ。(笑) ほんとに。主人が歯磨きしてるのが憎くしてしまうようになって。	E
		(退院後1週間後の外来受診の頃の自分の身体の辛さは) 正直それは言ってもらえなかったですね。自分の体の心配はあんまりしてなかったかもしれない。	D
		あの3か月が。あそこでたぶん精神的にも鍛えられると思いますし。あの、筋力も多分あそこでついたんだと思うんですよ。筋肉痛がピークだったの。で、今、結構、筋肉痛とかもなくなってきたので。あそこで鍛えられるんだろな、みたいな。	D
		最初本当にちっちゃくって。泣くと全身で泣くんですけど、血管とか切れちゃうんじゃないかって思ってた。そのままにはやっぱりしておけない感じで。でも、なんか、1か月とか2か月とかたつと、身体つきもちょっとしっかりしてきて。太ってくれて。なんとなく、大丈夫な気がして。	E
哺乳瓶にしてもおっぱいにしても。とにかく飲んでくれない。だから、それが入院中も退院してからも。(自分が) ずっと泣きながら哺乳瓶傾ける。おっぱいあげてって感じてた。(弟の方が) 飲んでくれなかったです。すぐ寝ちゃう。(体重が増えてくると) 安心しますよね。3000超えたくらいから。やっぱり気持的には楽になった。	E		
(1か月健診で医師や助産師が) ほんとに頑張ったねって褒めてくれて。うれしかったです。	E		
⑦【自己成長を感じる喜び】	双子によって自分のペースを乱されることに慣れて柔軟になり、知らない人と交流することで社会性は高くなり、育児を通して自分の成長を実感していた	3か月くらいから笑顔が出始めたんですよ。笑顔が出て、泣く時間が減って。外出できるようになって。寝てるわけじゃない、泣いてるわけじゃない。起きて泣いてない時間ができてきた。(泣かない時間ができて) うれしかった。	E
		(外に出れると) 違いますね。全然違います。そうですね。すっきりするし、あと、皆さん結構声をかけてくださるので、ちょっと気分転換になりますね。	B
		なんか、その、無事にその1か月が終わったっていうか。その誕生日の、また次の月が来たみたいなきによかったなって。	C
		ペースを乱されることへのストレスは、多少、はじめはあったと思うんですけど、まあ、だんだん慣れてきて。まあ、仕方ないかなあと。自分のペースでいろいろやりたい方だったんで。確実に乱される。それに慣れるっていうのが、やっぱり思うようにはいかないっていう。	C
		(自分自身の変化については) 自分では、そんなにでもないんですけど。うーん、前よりは、そんなにちょっとのことでイライラしなくなったっていうか。しょうがないじゃんっていう。あきらめって言ったって要すんですけど。そういうのはあるかもしれないですね。	C
		外で話しかけられることが多かったんですけど、今まで結構目立たないように地味に生きてきたのに、こうやって他人と会話する機会をもうけられて。これは、なんか、勉強しろってことなのかなって。社会性をつける勉強になっているかなって。	A

にはもっと長く居てもいいんじゃないって母親には言われたんですけど。私はちょっと、あんまり主人と離れてるのはどうかと思って。いろいろ将来慣れてもらわないといけないし。だから、私はちょっと、それを気にしてましたね。

(B)

3) 【双子育児の中で試行錯誤】

〔自分の気持ちを整理し、自分なりの育児方法を選択〕

(授乳は) 起して飲ませることが多かったですね。まずおっぱいを飲ませてからミルクっていう順番だったので、同時に泣いちゃったときは1人はミルクを先に飲ませて、で、もう、抱いて飲ませるとかはしてなくて、タオルとかに立てかけて、哺乳瓶を。それで飲ませてたんですよ。その間におっぱいを飲ませて、しばらくしたら交代みたいにやってみました。(そういうやり方は) 多分本に載ってて、本で読んだり、インターネットで見たりしてました。(B)

生まれた時ちっちゃかったんですよ。だから2人とも直母ができなかったんですよ。で、搾乳とかして与えてたんですけど。搾乳して、哺乳瓶で飲ませて。1人がミルクとか。あと、1日おきとかにやったりとかしてたんですけど。3か月になるくらいまでやってはいたんですが、なんか、その、母乳もけっこうエネルギーが必要で、自分もちゃんと食べなきゃいけないし、なんかその、吸い取られる感じがあったので、ミルクに切り替えちゃった感じですね。(C)

4) 【自分なりの育児確立】

〔理解あるサポーターに支えられ『できる』ことを実感していく楽しさ〕

(夫は) 夜みてくれたりとか。寝かすために。夜中の3時に交代ねとか。(D)

そんな辛いつて感じではなくって。やっぱ身体は疲れて眠い、みたいな。気持ち的にはそんなに。しんどいとかはなかったですね。(A)

1週間後に病院に体重測定で行ったときにミルク足さなくていいのって周りに言われるんですよって言ったら、助産師さんたちが「全然大丈夫だよ」って「自分のやり方で全然間違っていないよ」ってすごい言ってくれて、安心しました。(A)

5) 【双子を理解していく楽しみ】

〔2人の子どもがいる双子育児ならではの良さの実感〕

子どもの心配事に関して、片方だけに現れるなら育て方の問題じゃなくって、その子の性格っていうか、体質っていうか、そういう問題って割り切れるので、そんなに自分を責めずに済むかもしれないですね。(D)

最初のうちは、甘えん坊な泣き虫と自由奔放な人って感じだったんです。なんか1人はホントよく泣く子で、ずっと抱っこばかり。もう1人の子はあんまり抱っこしなくて大丈夫かなって思ってたんですけど。でも、そのうち逆になったりして。2人の違いを見つけれられておもしろいなあって感じますね。(A)

2人の性格の違いが多分現れてきたっていうか。3か月く

らいの間です。多分1人目の子は愛想がよくないんですよ。べつになんかこうマイペースっていうか。自分のやりたいようになんですけど。2人目の子は、なんか愛想が良くて、こう、笑顔を振りまくっていうか。そういう感じが出てきて。いたずらっぽい笑いをニッと、こうニヤッとするっていうか。そういうのは上の子にはないんです。(B)

6) 【双子の母親としての達成感】

〔自分と双子の成長により双子育児の大変さは喜びへと変化〕

あの3か月が。あそこでたぶん精神的にも鍛えられると思いますし。あの、筋力も多分あそこでついたんだと思うんですよ。筋肉痛がピークだったので。で、今、結構、筋肉痛とかもなくなってきたので。あそこで鍛えられるんだろうな、みたいな。(D)

最初本当にちっちゃくって。泣くと全身で泣くんですけど、血管とか切れちゃうんじゃないかって思って。そのままにはやっぱりしておけない感じで。でも、なんか、1か月とか2か月とかたつと、身体つきもちよっとしっかりしてきた。太ってくれて。なんとなく、大丈夫な気がして。(E)

3か月くらいから笑顔が出始めたんですよ。笑顔が出て、泣く時間が減って。外出できるようになって。寝てるわけじゃない、泣いてるわけじゃない。起きて泣いてない時間ができてきた。(泣かない時間ができて) うれしかった。

(E)

7) 【自己成長を感じる喜び】

〔双子育児によって柔軟性や社会性が高くなっていることを実感〕

(自分自身の変化については) 自分では、そんなでもないですけど。うーん、前よりは、そんなにちよっとのことでイライラしなくなったっていうか。しょうがないじゃんっていう。あきらめって言ったら変ですけど。そういうのはあるかもしれないですね。(C)

外で話しかけられることが多かったんですけど、今まで結構目立たないように地味に生きてきたのに、こうやって他人と会話する機会をもうけられて。これは、なんか、勉強しろってことなのかなって。社会性をつける勉強になっているかなって。(A)

## V 考察

### 1. 双子を正期産で出産した母親の産後3か月間の育児体験における肯定的感情

双子の母親は【理解のない周囲へのストレス】を感じていた。しかし、【双子育児の中で試行錯誤】しながら自分の気持ちを整理し、自分なりの育児方法を選択していったことで【自分なりの育児確立】へと繋がっていた。先行研究では、双子の育児において、困難や問題を対処できていると感じられることが、母親の肯定的な自己評価につながる場面になり得るとされている<sup>31)</sup>。本研究の双子の母親が【理

解のない周囲へのストレス】を感じていたことは、理解の得られないストレスの一方で自分を支えてくれる夫や実家の親族、医療者の存在があることへの気づきに関連し、できることを実感して【自分なりの育児確立】をした際の肯定的感情に影響を与えていたのではないかと考える。つまり、双子の育児上の問題やストレスは、克服体験をすることで肯定的感情を伴って双子の母親が自信を得るきっかけになる可能性があると考えられる。また、【双子育児でのプラスとマイナス面を意識】も肯定的感情が主となる体験ではなかったが、【双子育児の中で試行錯誤】することを通して【双子を理解していく楽しみ】となっていた。このことから、母親は育児の様々な場面で否定的感情と肯定的感情の両面を持つアンビバレントな状態にあるとされている<sup>32) 33)</sup>が、肯定的感情を伴わない体験も後に双子の母親が肯定的感情を伴う体験に影響を与えていると考えられる。

本研究の双子の母親は子どもとの関わりの中で、同じ成長発達の子どもの2人いることの良さを感じながらも、2人同時に対応できない状況の中で1人が我慢しているのではないかと【双子育児でのプラスとマイナス面を意識】し、気にしていた。しかし、双子の母親は【双子育児の中で試行錯誤】することを通じて、子どもを注意深く見ることや2人を見比べることで成長発達の変化に気づくこと、成長発達に伴って現れる反応に気がつきやすいことも喜びと捉え、違いを見つけることに【双子を理解していく楽しみ】という肯定的感情を見いだしていた。そして、1対2の関係によって自分を責めずにすむことに気がつき、双子の良さを実感しながら子どもとの関係性を深めていた。これは、始めに2人の違いを見つけ、双子の性格と身体的特徴に注目することで2人の違いを際立たせ、個別化に至るというAndersonら<sup>34)</sup>の双子の愛着形成理論に認められる体験であった。よって、これらの肯定的感情を伴う体験は愛着形成に関連していると考えられる。単子の母親が子どもに対する愛着を感じる際には育児の楽しさや幸せを感じており、肯定的感情が愛着形成に関連していることが報告されている<sup>35)</sup>。本研究結果から双子の母親においても肯定的感情が愛着形成に関連していることが考えられた。よって、愛着形成を促進していくためにも肯定的感情を支える看護の必要性が示唆された。

【双子を理解していく楽しみ】として双子一人ひとりの性格の違いや2人が意識し合う様子に気がつくことが認められていた。小澤は、産後4か月以降の双子の母親を対象とした研究で、双子一人ひとりの個性を理解し、双子の母親として一人ひとりに対応できることは喜びであるとともに、双子の母親の自信につながる<sup>27)</sup>と述べている。本研究の双子の母親が【双子を理解していく楽しみ】を感じ双子との愛着を形成したことは、【自分なりの育児確立】で『できる』ことを実感したことと合わせて双子の母親が自信を得ることに繋がっていたと考える。このことから、双子の母親は産後3か月間の間にも産後4か月以降の双子の母親に認

められている自信につながる体験を重ね、それらの体験の中で肯定的感情を抱いていることが考えられた。

本研究の双子の母親は、2人いることで1人が我慢しているのではないかと気にしていた。授乳方法についても周囲からのストレスを感じながらも子どもの体重や哺乳力に合わせて直接母乳、搾乳、人工乳の活用など自分なりの授乳方法を確立していた。そして、双子の母親としての葛藤やストレスを克服し、【自分なりの育児確立】をしていた。母親役割の獲得には、予期的不安や授乳方法の獲得、対処の自己決定による自身の成長のための葛藤<sup>21)</sup>が含まれており、本研究の双子の母親の体験と一致する。また、双子ならではの1対2の関係を通して【双子を理解していく楽しみ】は、双子の母親が双子一人ひとりとの相互作用を通して愛着を形成し、自分と双子の成長により育児の自信を得る体験であった。自信を得ることは、親になることへの適応と関係している<sup>36)</sup>。よって、双子の母親の肯定的感情は愛着形成と母親としての自信を得ることに関連し、双子の母親として適応していく体験の中で認められ、母親役割の獲得に影響を与えていることが推測される。

## 2. 双子を正期産で出産した母親の肯定的感情が母親役割の獲得へ及ぼす影響

本研究の双子の母親は子どもとの相互作用によって愛着を形成し、【双子を理解していく楽しみ】を感じ、【自分なりの育児確立】した結果、【双子の母親としての達成感】と【自己成長による喜び】という肯定的感情に至っていた。これらの体験は、母親役割の定義である子どもとの相互作用を通して、自身の成長のために葛藤し、母親としてのアイデンティティを積み上げること<sup>21)</sup>に相当する。Mercerの母親役割の獲得によると、健康な単子を出産した初産婦では、産後4か月頃から母親役割の獲得に至り、母親としての自己を確立し、子どもとの関係性をさらに深めていくとされている<sup>37) 38)</sup>。しかし、近年の単子の母親を対象とした研究では、母乳育児行動を通して1か月健診までに子どもの特徴を考慮したケアの試行錯誤や母親自身の役割を評価し、子どもとの絆を深めていく母親役割の達成段階と似たカテゴリが抽出されていた<sup>20)</sup>。よって、双子の母親においても正期産児で母子分離期間がほとんどない場合は、産後3か月間に母親役割の獲得に至る可能性が示唆される。

双子の母親の肯定的感情を伴う育児体験は、母親役割を獲得する過程で要となる子どもとの相互作用や、自身の成長のための葛藤、母親ができると感じる体験によって自信を得て母親としてのアイデンティティを積み上げていく体験の中で多く認められていた。このことから、双子の母親が双子一人ひとりの違いを見つけることを楽しみながら、違いを個性として捉え双子一人ひとりのとの関係性を深めることや、試行錯誤しながらマイナス面を克服した喜びを体験するなどの肯定的感情をもつ機会を増やすことで、母親役割の獲得を促進できる可能性が考えられる。

### 3. 双子を正期産で出産した母親の肯定的感情と母親役割の獲得を促す看護

正期産で双子を出産した母親が【双子育児の中で試行錯誤】するまでには、肯定的感情を伴わない体験もあり葛藤する様子が認められた。しかし、試行錯誤を通じて肯定的感情を伴わない体験も肯定的感情を伴う体験へと繋がり、母親役割の獲得へ影響していた。よって、看護者は母親が【双子育児の中で試行錯誤】する時期に、母親の心身の状態に合わせ、適切な看護支援を実施し、双子の母親が肯定的感情を持つ機会を増やることが重要であると考えられる。

【双子育児の中で試行錯誤】では積極的にサービスを利用したことで精神的には辛くなかった様子が認められた。また、試行錯誤の後に【自分なりの育児確立】をした際にも理解あるサポーターの支えが認められた。よって、双子の母親が肯定的感情を体験しながら母親役割を獲得するための看護支援として、ソーシャルサポートが大切であると考えられる。本研究の双子の母親へのソーシャルサポートについては、自ら主体的に双子育児に取り組む夫について語られ、夫が重要な実質的サポートの提供者であった。一方で、里帰りや夫が単身赴任中という環境のため、夫からの実質的サポートを受けていない母親もいた。しかし、夫からの実質的サポートを受けていない場合でも、母親は、実母をはじめとする親族によるサポート、公共サービスを利用しながら、夫と子どもの成長を共に確認し合うことや夫に大変さを理解してもらえたことで夫からの精神的サポートを実感していた。本研究の母親が大変な双子育児の中で肯定的感情を体験できていたことは、夫からのサポートを実感し、母親が夫の存在を高く評価していたことが影響している可能性がある。また、夫の存在を評価できた背景には、実質的サポートを行う人員が確保されていたことが影響していると考えられる。双子育児の問題として育児量の多さから生じる時間のなさ<sup>11)</sup><sup>39)</sup>、人手不足<sup>39)</sup>があり、実質的サポートを行う人員は、多ければ多いほど母親の身体的負担を軽くすることができる。よって、心身負担を軽減し、母親役割の獲得を促す為にも、妊娠期より産後のソーシャルサポートを調整しておくことが重要である。その際、夫だけでなく双子育児をサポートする予定の実母、義母などの親戚へも栄養方法の選択や、双子への対応等を伝え、双子の母親が育児の中で試行錯誤する大変な時期を理解あるサポーターで支えていくことが必要だと考える。また、母親が夫からサポートを受けていると実感することが重要であるため、夫へは実質的サポートに加え精神的サポートの必要性を伝えていくことが大切であると考えられる。さらに、双子の母親が試行錯誤している時期には、看護者は双子の母親へのソーシャルサポートが適切に機能しているか確認し、必要に応じて再調整を行い双子の母親の肯定的感情を支えていく必要があると考える。

### VI 本研究の限界と今後の課題

双子は早産となることが多いが、早産児の母親については出生週数やNICU入院に伴う母子分離期間に応じて、育児体験による肯定的感情や母親役割の獲得が異なる可能性が考えられる。双子の母親についての理解と支援の充実へ向け、今後は早産児双子の母親へも調査対象を拡大していく必要がある。

### VII 結論

双子を正期産で出産した母親は、【理解のない周囲へのストレス】と【双子育児でのプラスとマイナス面を意識】しながらも、【双子育児の中で試行錯誤】する中で、【双子を理解していく楽しみ】を感じながら【自分なりの育児確立】をし、【双子の母親としての達成感】や【自己成長を感じる喜び】という肯定的感情を体験していた。双子の母親の肯定的感情は、愛着形成と母親としての自信を得る体験に関連し、母親役割の獲得へ影響を与えていると考えられた。

### 謝辞

本研究にご協力いただきました双子サークル、子育て支援拠点の皆様、双子のお母様方、分析方法を丁寧にご指導下さった山浦晴男先生に深く感謝いたします。本論文は、横浜市立大学大学院医学研究科における修士論文の一部に加筆・修正したものである。また、本論文に関連する利益相反事項はない。

### 引用文献

- 1) 厚生労働省：単産－複産（複産の種類・出生－死産の組み合わせ）別にみた年次別分娩件数，厚生労働省ホームページ。 <[http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/GL71050103.do?sessionid=ZS4PS2pCHvnyGnwK1x9yp6NjNfNjNfXh3QS8v4CKk5SmZhfKcGd2!353452133!1377160829?\\_toGL71050103\\_&listli=000001112798&forwardFrom=GL71050101](http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/GL71050103.do?sessionid=ZS4PS2pCHvnyGnwK1x9yp6NjNfNjNfXh3QS8v4CKk5SmZhfKcGd2!353452133!1377160829?_toGL71050103_&listli=000001112798&forwardFrom=GL71050101)>（アクセス：2015年10月25日）
- 2) Campbell DM, Templeton A : Maternal complications of twin pregnancy, *Int.J. Gynaecol.Obstet.* 84 : 71-73, 2004.
- 3) Jerrie S, Refuerzo : Impact of multiple births on late and moderate prematurity, *Seminars in Fetal & Neonatal Medicine.* 17 : 143-145, 2012.
- 4) 大木秀一, 浅香昭雄 : 双生児の成長と発達に関する研究 (4)－双生児の妊娠週数別出生児体重・身長・胸囲・頭囲－, *小児保健研究.* 51(6) : 697-704, 1992.
- 5) 石村由利子, 前原澄子 : 双胎妊娠の妊婦のストレスと看護に関する研究 (第1報)－単胎妊娠との比較－, *母性衛生.* 40(1) : 120-129, 1999.



- 6) Maxine L Croft, Vera Morgan, Anne W Read, Assen S Jablensky : Recorded Pregnancy Histories of the Mother of Singletons and the Mothers of Twins – A Longitudinal Comparison – ,Twin Research and Human Genetics. 13(6) : 595-603, 2010.
- 7) 谷垣伸治 : 双胎妊娠の新しい知見 – M-D twinとD-D twinの臨床病態の違いについて – , 日本産婦人科学会雑誌. 63(1) : 11-16, 2011.
- 8) 横山美江 : 単胎児家庭の比較からみた双子家庭における育児問題の分析, 日本公衆衛生雑誌. 49(3) : 229-235, 2002.
- 9) 横山美江, 清水忠彦 : 多胎児に対する母親の愛着感情の偏りと関連要因の分析, 日本公衆衛生雑誌. 48(2) : 85-94, 2001.
- 10) 横山美江, 清水忠彦, 早川和生 : 双胎・品胎家庭の育児に関する問題と母親の疲労状態, 日本公衆衛生雑誌. 42(3) : 187-193, 1995.
- 11) 北岡英子, 杉原一昭 : 双子育児の実態と育児支援に関する研究 (第1報) – 双子と単胎児の母親の比較を中心にして –, 小児保健研究. 61(5) : 661-668, 2002.
- 12) Tanimura M, Matsui I, Kobayashi N : Child abuse of one of a pair of twins in Japan, THE LANCET. 336 : 1298-1299, 1990.
- 13) 厚生労働省科学研究「周産期ネットワーク：フォローアップ研究」班. 三科潤, 河野由美 (編) : フォローアップの概念, ハイリスク児のフォローアップマニュアル. メジカルビュー社, 東京 : 2007.
- 14) Klaus MH, Kennell JH, Klaus PH, 竹内徹 (訳) : 第7章早産児の誕生の親子結合, 親と子のきずなはどうつくられるか. 第1版, 医学書院, 東京 : 159-207, 2001.
- 15) 浅見恵梨子, 早川和生, 松本一弥, 他 : 双生児母子の産後の睡眠覚醒リズムの推移, 奈良県立医科大学医学部看護学科紀要. 4 : 17-25, 2008.
- 16) 皆川貴子, 服部律子, 宮川幸代 : 双子の授乳状況の実態と課題 (第1報) – 生後10ヶ月迄の双子の授乳状況 –, 母性衛生. 41(4) : 454-458, 2000.
- 17) 藤井美穂子 : 出産後3か月までの双子の母親が授乳方法を形成するプロセス, 日本助産学会誌. 24(1) : 4-16, 2010.
- 18) 上川友美, 小林康江 : 双子を持つ母親が行っている育児に関する研究, 山梨県母性衛生学会誌. 4 : 21-27, 2005.
- 19) 前原邦江 : 産褥期の母親役割獲得過程を促す看護介入 – 母子相互作用に焦点をあてて –, 日本母性看護学会誌. 5(1) : 38-45, 2005.
- 20) 稲田千晴, 北川真理子 : 産褥期の母乳育児をする母親の母親役割の体験, 日本助産学会誌. 24(1) : 40-52, 2010.
- 21) 二川香里, 長谷川ともみ : 母親役割の概念分析, 富山大学看護学会誌. 14(1) : 1-11, 2014.
- 22) 古橋沙人子 : 子育て施設を利用している親の「子育ての喜び・楽しさ」に関する意識調査からの考察, 滋賀女子短期大学研究紀要. 31 : 49-60, 2006.
- 23) 越智祐子, 村上寿来 : 「子育ての楽しみ」要因と少子化対策の可能性 : 兵庫県を事例とした探索的分析から, 厚生指針. 56(7) : 9-16, 2009.
- 24) 鈴木由紀乃, 小林康江 : 産後4か月の母親が母親としての自信を得るプロセス, 日本助産学会誌. 23(2) : 251-260, 2009.
- 25) 清水嘉子, 伊勢カンナ : 母親の育児幸福感と育児事情の実態, 母性衛生. 47(2) : 344-351, 2006.
- 26) 藤井美穂子 : 双子を持つ母親の退院後1か月間の育児体験, 日本助産学会誌. 21(2) : 77-86, 2007.
- 27) 小澤治美, 森恵美 : 母親役割の自信につながる双子の母親としての体験 – 生後4~8か月の双子を養育中の母親を対象にして –, 日本母性看護学会誌. 7(1) : 19-26, 2007.
- 28) Beck CT : Releasing the Pause Button – Mothering twins during the first year of life –, Qualitative Health Research. 12 : 593-608, 2002.
- 29) 山浦晴男 : 質的統合法入門 – 考え方と手順 –, 第1版, 医学書院, 東京 : 2012.
- 30) 正木治恵 : 看護学研究における質的統合法 (KJ法) の位置づけと学問的価値, 看護研究. 41(1) : 3-10, 2008.
- 31) 小澤治美 : 母親が双子一人ひとりの個性に応じた子育ての自信を得る過程の特徴について, 日本母性看護学会誌. 10(1) : 9-16, 2010.
- 32) 高田直美, 巽あさみ : 子育ての想像と現実の乖離がもたらす母親の感情, 日本地域看護学会誌. 10(2) : 47-53, 2008.
- 33) 加藤道代, 津田千鶴 : 育児初期の母親における養育意識・行動の縦断的研究, 小児保健研究. 60(6) : 780-786, 2001.
- 34) Anderson A, Anderson B : Toward a substantive theory of mother-twin attachment, The American journal of maternal child nursing. 15, 373-377, 1990.
- 35) 佐藤里織 : 妊娠期および出産後における Maternal Attachmentと母親の育児形態との関連 – 妊娠初期から出産後18か月までの縦断研究 –, 小児保健研究. 64(3) : 507-514, 2005.
- 36) Zahr, LK : The relationship between maternal confidence and mother-infant behaviors in premature infant, Research in Nursing & Health. 14 : 279-286, 1991.
- 37) Mercer RT : The Process of Maternal Role Attainment over the First Year, Nursing research. 34(4) : 198-204, 1985.
- 38) Mercer RT : Nursing support of the process of becoming a mother, Journal of Obstetric, & Neonatal Nursing. 35, 649-651, 2006.
- 39) 横山美江, 中原好子, 松原砂登美, 他 : 多胎児をもつ母親のニーズに関する調査研究 – 単胎児の母親と比較分析 –, 日本公衆衛生誌. 51(2) : 94-101, 2004.